

新刊紹介

堺市史

堺市役所

大正十三年、東宮御成婚記念として、堺市が市史編纂事業を起してより五週年、稿成つて昨四年五月、先づ第一巻本編第一、第四巻資料編第一、第五巻同編第二の三巻を公刊したが、續いて本年七月第二巻本編第三、第三巻同編第三、第六巻資料編第三、第七巻別編の四冊が刊行され、明年二月出版豫定の第八巻索引年表編を以て、其の完成を告ぐる事になつた。本月初前四巻の机邊に寄せられたるに依り、昨年刊行の三巻を併せ、こゝに改めて紹介の秃筆を走らさうと思ふ。

思ふに國史學研究の發展は、各地方史、諸特殊史の完成と諸地方、諸家に存するすべての零細なる資料の統一整理とに俟つ事殊に大なるものがある。この意味に於て我國最近に於ける各地方史編纂刊行の續出と、古社寺、諸家の古記録、古文書の整理公刊の流行とは、そのまゝ我國の史學がいよゝ堅實なる足ごりを以て進みつゝある事を示すもので、まことに學界の快心事と言ひつべき事である。

堺市史編纂部は、三浦周行博士を編纂監修にいたゞき、牧野

信之助氏を編纂長とし、中村、小葉田、藤、山本等の諸氏を編纂囑託にもち、中井、曾根氏を編纂員として形成されたものであつたが、編纂監修三浦博士につきては今更々々を要せず、編纂長牧野學士に至つても學界既に定評あり、さきに地方史中出色の雄篇を以て數へらるゝ福井縣史、滋賀縣史を完成せしめて、斯方面に殊に練達の才を誦ばるゝ人である。昨年先づ三巻出づるや直に地方史の最高峯として噴々の好評を博し、全巻刊行の速かならん事を切望されし所以又こゝにある。

由來堺港は南北朝以來長く我國の樞要なる門戸の一として、殊に華々しき活躍を見せ、引續き日本史の本流に棹さし來つたものであるが、其の輝しい過去の足跡が嚴正なる學的整序を経、こゝに堺市史全七巻となつて現れた事、まことに吾人學徒の限りなき喜びとせねばならない所である。

本編三巻、開卷劈頭に先づ「地理概況」の編を設け、「地質」「氣象」の兩方面より堺市の地理學的研討が行はれる。以下第二編黎明期、第三編全盛期、第四編爛熟期、第五編整頓期と全體を四期に分ち年代を逐つて記述が進められて行く。この時代區分は本編のみならず、資料編にも、別編にも亦應用され、全體としての統一整成が施されてゐる所である。「黎明期」は堺の濫觴より南北朝時代迄を含み、「上古に於ける近畿の港灣」「原始期の堺」「堺の地名」「傳説の堺」と筆を古代史圏内に起し、引續き「記録に現れ出した堺」にて定頼卿集に鹽湯浴の地として名を出す「さか井」を其の初見なりとし、以下此地が熊野詣の王子

所在地として漸く其の存在を現し、紀伊及び大和地方への交通の衝に當るに依り、その發展漸く見るべきものあり、更に南北「堺庄の成立」に依つてその將來への發展根據は確立されたと言ひ、更に進んで「堺庄と住吉神社」の關係は古くより考へらるゝが延元元年の後醍醐天皇の諭旨は明かに當時堺庄が其神領たりし事を示すことなし、住吉社の南朝への忠誠は堺庄民の吉野内應を引起し、これに依て堺商人の魚貝賣買を禁止された爲、奈良春日社の神供闕如したとの事實を語つて、當時既に其惠まれた港灣に依り、堺が近畿の重要な物資の集散地であり、供給地となつてゐた事を示すものであらうと結ぶ。南北兩朝の争戦は、殊に水軍海賊の活躍を見た事に依り「港灣の利用」「南朝と海賊」の兩章を掲げ、更に當時の近畿の要津兵庫、敦賀、尼崎等の「港灣の軍事的價值」を説きて以て「堺の軍事的價值」に及ぼしてゐるのである。堺の成長は山名氏、大内氏に占めらるゝに至りて一段と其の著しさを示したが這箇の狀勢は「大内氏と堺」の章に於て詳述される。「堺の繁榮」に於て、南北朝を通じて堺は其の要衝たるに依り南北争奪の的となつたが、しかも堺そのものは不思議に常に兵燹を免れ、市内は奇蹟的な平和に恵まれたが故にその間漁港として、又中國九州南海と京畿との交通の要地として商業上長足の進歩をなした事を示し、かく物質漸く足つてこゝに「堺の文化の曙光」は見出され始めるが「寺院の増設」と「正平版論語の開板」の二節に依て其の内容を語らしめてゐる。以上にて黎明期を終つて次に全盛期に入るが「全盛期」は室

町時代より豊臣時代迄を包含し、日明貿易を中心に日本史の最尖端におぼる堺の全相をふかんとするものである。「日明貿易と堺との新關係」より「第一」「第二」以下「第五」迄の「遣明船の堺出帆」の事情よりその狀勢を明かにする用意としてその前に「室町初期の堺の管轄」「堺の殷富」「應仁、文明の内亂と堺」「足利幕府の對明貿易」の各章を設け、前期に於ける遣明船が兵庫港を其の出帆地とし博多を経て行はれたるに反し、後期に於ては應仁の亂以來の幕府及び細川氏と大内氏との暗闘に依り、遣明船發着港としての榮は以下兵庫博多を離れて遂に堺港が占むる所となつた、いきさつを詳細に明快に叙述せられてゐる。以上先づ往古の渺たる「さか井」より漁港、商業市と次第に發展し遂に我國第一の開港場と迄なつた歴史的發展の過程であるが一部一局に偏するなく、常に全日本史的關心の下に堂々その真相をうつつにつとむるもので——この項監修三浦博士の執筆にかゝるものである。

更に章は進められ足利季世に於ける「堺と其の附近の形勢」がのべられて後「日明貿易再興に關する努力」の條にて先にまだえだ日明貿易は遂に琉球の仲介にて再興したが諸種の事情は博多をもつ大内氏に有利に展開し、堺商人の支持になる細川船は中止のやむなきに至つた事情よりこれにて日明の堺に於ける交渉は遂に終りを告ぐるものなる事を語りつゞける。以下「三好時代」「織田時代」「豊臣時代」と戰國時代の堺をのべその間「堺と海運」「堺の繁榮」の題下に、明と交渉は終つたが内國航路に於

ける堺は依然一方の覇者で南海路、中國路の中心港として盛況を持続した事を示し、引續き起ころ華々しき南蠻貿易のバックを理解せしめんとしてゐるのである。次にほ少しく筆を轉じて堺に於ける二大宗教、即佛教と耶蘇教に二章を費やす、佛教の堺にて見るべき宗派は禪宗一向宗及び日蓮宗である。今一向宗の條を見る。「蓮如と堺」の節下に從來の蓮如の傳記は彼が山門の迫害を避けて近江に遁れ、更に北國に轉じ、併して後畿内諸國にかへり來つて巡錫をなし堺坊の如きこの時の創建なりといふが、正確な記録文書の上より見るに如上の説は疑はしく「北國巡化に先だち先づ畿内諸國に飛躍をなして他日の足溜りとし堺の坊又この時に構へられたものであらう」この新説を提供してゐる。更に「證如と堺」を語つて當時の堺は本願寺の事實上の臺所たりし事を明かにす。「堺と耶蘇教」の章下には、ザエリオに始まり、ボレラ、ダイメイダ、フロイスを経て家康の禁教に至るまでの堺中心の開教史が詳細に記述されてある。堺の全盛は南蠻貿易、御朱印船の活躍に依つてその頂點を極むるが、這般の狀況は「堺と南蠻貿易」の章及び「南蠻貿易に於ける堺港」「堺商人の南洋活躍」「堺に於ける南蠻貿易」の三節に詳密を盡されり。しかも元和二年耶蘇教禁壓の方針は外國船の渡來を長崎平戸に限り、更に寛永鎮國に依つて長く堺商人の海外出勤を止めたり、堺の貿易港としての生命は長く終りを告ぐるに至つたのである。

章は一轉して文化的方面にむかひ、先づ「堺の圖書出版」をあ

げて堺版を述べ、天文版論語にて有名なる「阿佐井氏の出版」を語るが、紹鴎を生み、利休宗久を出した「堺と茶湯」又興味ある筆致の下にかゝれてゐる。次で「堺と文藝」「堺と學術工藝」を概観して全盛期の巻を終る。

この巻中「堺と其附近の狀勢」「三好時代」「織田時代」「豊臣時代」の四章は小葉田氏、「堺と耶蘇教」「堺と南蠻貿易」の二章は藤氏のそれ、執筆にかゝるが他はすべて三浦博士の筆になるものである。

第四篇爛熟期は大阪陣より明治維新迄を包み、中村氏、牧野氏の執筆する所である。大阪陣は堺史發展上の重大な一轉機であつたので、全國舉げての戦亂により内地商業はもとより、外國貿易又杜絶し漸く經濟的威力衰へ初めし、さ中、元和元年四月廿八日夏の陣に於ける城兵の放つた火に依て堺全市は灰燼と歸してしまつた。この大試練の前に異常な努力を以て更生の爲堺市民は立ち上つたが、かくして復興した堺は時勢の波動に依つて以後前代とは異つた色彩を以てその史的發展を繰り出して行くのである。如上の經過は「大阪役と堺」「新市街の復興」の兩章に詳しい。續いて「堺奉行所の組織及び職制」「自治制度の確立」の兩章により、堺市の近世史的誕生よりそが徳川時代を通じて極めて堅實なる形を以て進んで行つた事をあさづけられる。前代の華々しい對外貿易は以後長く見るを得なかつたが、その中であつて僅かに堺商人の氣を吐く事を得たのは糸割符貿易であつたので此時代上半期の堺商業の中心となつたと共に以下

幕末迄引續き興亡盛衰はあつたが經緯されたものである。以上の委曲は「堺と初期の糸制符貿易」「堺と再興後の糸制符貿易」の兩章につくされる。

「近世後半期の商工業」「新大和川開鑿と堺の修築」「海陸の交通」「堺廻りの新田の發達」「市民の文化と生活」「幕末の風雲と堺」の各章各々近世後半期より幕末迄の堺港の全面をふがきて詳をつくし、以て爛熟期の堺史を閉づる。第五編を整頓期とし、維新以後より現代に及ぼすものであるが、章次四、次の如くである。「明治初年の堺」「堺區時代の概観」「市制實施以後に於ける堺市の發展」「最近の堺市勢」以上にて本編三卷を終る、古代より現代に至る總頁二千三百有餘。堺市の盛衰をつくして餘蘊なきものがある。

第四卷以下六卷迄の三卷は資料編にして黎明期、全盛期、爛熟期、整頓期の區分の下に各々交通、堺庄、社寺、戦争、人物、外交、商工業、宗教、茶道、學藝、市政、港灣、漁業、農政、教育、等の細目を設けて零細なる記録、文書の斷簡に至る迄蒐集され分類し統一して完全なる整理が施されてゐる。この豊富なる資料集は各項目をそれらの文化研究に貢獻する所殊に大なるを思はる。

第七卷別編は人物誌、社寺誌、教會誌、及び名勝誌より成る。

人物誌は堺に生れ、又は他地方より來つて事蹟を傳へらるゝ人物を網羅して編されたものでこれ又本編の時代區分に從ひ各自没年の順序により編年體に排列さるゝ所である。社寺、教會誌

は本市に現在する社寺を神社は社格に依り、寺院は宗派別に依つて區分し、教會は神道と基督教に分つてのべられ、名勝誌は神社及び神社社、寺院及び寺院址、史蹟名勝、天然記念物の四章に分ち、その著名な箇所につき、位置の順に從つて其の遺址につき叙述されてゐる。本編とは異つた興味をもつ一巻である。

以上雄篇完成の喜びのあまり殊に長々しき紹介を試みたが、本史一貫、全日本史的堺の開明に意を用ふるものでこの點本書の特色であり、且既成他史を壓する所以である。實に都市港灣生活を中心とした社會史的、政治史的、經濟史的、文化史的等各方面の研究の總量であり、一般史學界は勿論、各特殊史研究の分野に迄その寄與する所の大を感ずるものである。敢へて史的研究に關心を持つ諸彦の机邊にすゝむ(全八卷、堺市役市)藤島

青丘學叢 第一號

青丘學會 編輯

青丘とは東方の國の汎稱にして延いては古來朝鮮の異名となつてゐた。今回京城帝國大學、朝鮮總督府及び朝鮮總督府朝鮮史編修會其他に於ける學者等が相圖られて青丘學會を組織されて、朝鮮滿洲を中心とする極東文化を、歴史、考古、土俗、社會、言語、文學、宗教、美術等各方面に互つて研究することにもその普及に努力せんことを期せらるゝことは學界にまつて眞に祝福すべきことである。青丘學叢はかゝる青丘學會の學術的事

業の發表雜誌にして廣く各方面の學術的研究を網羅し學界の近狀を紹介し從來の業績を集成し且つ研究參考の新資料を供し以て極東文化研究の綜合的成果を得、尙ほその普及にも寄與する所多からんことを力めて編輯さるゝのである。この八月に生れた本誌第一號の内容を見るに、「李朝の朋黨を略叙して天主教迫害に及ぶ」(小田省吾氏)の一文は朝鮮近世史の真相を知る上に忘る可からざる重大なる意義を持つ李朝の朋黨を略述し、新しく黃嗣永の帛書なる史料を提供して天主教迫害と黨派の關係を論述されてゐる。「狐を意味する朝鮮方言」(小倉進平氏)は朝鮮全土に互つて精細に調査された言語現象の研究にして、山口正之氏は朝鮮基督教史料としての己亥日記の價值を吟味され、「屏虎是非に就いて」(申奭鎬氏)は朝鮮の末期西曆一八〇五年以後約八十年嶺南の儒林は安東郡虎溪書院を中心として屏論虎論の二派に分れて大黨論を爲した學黨の争ひを論じ、次の末松保和氏の「太平御覽に引かれた倭國に關する魏志の文に就て」、中村榮孝氏の「朝鮮經濟史雜考」、多田正知氏の「稼亭集解說」等共に精細なる研究の成果に外ならぬ。又滿鮮關係の新史料と題して中村榮孝氏は清太宗朝鮮征伐に關する古文書二つ……一つは太宗が第二回朝鮮征伐の師を出だすに當つて天地を祭り、朝鮮の罪を擧げて征討の理由を告げた告文の草稿、今一つは太宗推戴に關して外藩各蒙古貝勒の朝鮮國王に送つた書、……を學界に紹介されてゐる。

從來史學文學其他の方面に關して純學術雜誌の存在しなかつ

新刊紹介

た朝鮮に於てのかくの如き内容を有つ本誌の雄々しき誕生祝を福することもにその健全なる發展か筆者は念願して止まぬものである。尙ほ他に朝鮮學報なる雜誌の發刊を聞くも不幸にして入手するを得ず紹介は他日に待つ。(年四回發行、會費年額參圓 京城府孝子洞青丘學會編(野上))

P. S. Rodriguez: Introducción

a la Historia de la Literatura

Mística en Espana.

p. 311. Madrid. 1927.

本書は著者も斷はつてゐる如く、書名の正しく示さんとするが如き「西班牙神祕文學史」ではないが、神祕主義に關する重要事項を全六章に互つて適切に解説し、廣く此の方面の文献を集めて殆んど各章毎に附加してゐるのは甚だ便利である。ベルゲの「宗教心理學論評及びその文献録」に似た性質のものであるが、それよりも優れて入念に且親切に企てられてゐる。一般的解説としては第二章に、神祕主義の諸概念、正統的神祕主義、神祕主義の積極的概念、哲學及び心理學より見たる神祕主義の諸項がある。此の種の研究者には重要な文献である。(横川)

D. Goddard: The Buddha's

一九九

一九九

Golden Path, pp. xii + 210,

London Luzac & Co. 1930.

會つては基督教士として華國に又本邦にその使命を遂行してゐた氏は、その基督教神祕主義研究を通じて端なくも佛教神祕主義に觸れ來り遂に佛教に興味を覺え、その形式的宗派的知識は蓋へ得たが、未だ實地の經驗に暗きか遺憾とし、日本に渡航せしを幸として、自身僧堂及び寺院の生活状態を親しく視察し、のが、氏の佛教生活開始の素因となつたのである。氏が本書を著すに至つた動機は「現今歐米には眞摯なる求法者にして思ひを佛教にかくる者は數多きも、經につかんとすれば、難讀難解にして近寄り難く、實地に行ぜんすれば師表を仰ぐに足る人なき爲、徒らに明け暮しをしてゐる。斯かる人々に對して、自らは元よりその位置に非ざる事は萬々承知してゐるが、一佛教徒として之を默視するに忍びず、敢へて此の企に及んだ次第である。幸に彼等の實修上の教導書ともなれば光榮である」。(序言取意)と云ふによつて明かに知らるゝ。されば本書はそのサブ・タイトルに見る如く、「實踐佛教綱要」であつて禪宗の教義及び行に基礎を置き、然かも之を現代的に解釋し現代生活に適應せしめんとするものである。而してその内容は八正道を取扱ひ、之を佛陀の王道とし、王道は心的統制を得る方法と見て聽て禪悟に導くものとされてゐる。即ち第一面の八正道、第二面のそれ、第三面のそれと三時的に展開せしめて精進道を明かに

してゐる。然しながら、全篇を通じて大乘味の底流に乏しき憾みがある。印度の近代的聖者、スンダー、シンガが基督教に回心しながらも多分に佛教的要素を留めてゐた如く、(にも)「基督教の完全」が折々顔を覗かしてゐる。然し書中又妙適の説明なしとせず。生まれ、生國アメリカに在つては雜誌(Nine)を發行して佛教思想を傳へ、今は又此度京都を訪れて參禪に餘念なき氏の此の眞面目なる求道の態度には敬服せざるを得ない。氏より一本を贈られたれば此處に紹介をする。(横川)

禪とは何ぞや 鈴木大拙著

大雄 閣版

著者が大阪の某禪寺に於いて試みたる二回の連續講演を集録したものが本書の形を取つてあらはれたのである。速記録によりたる爲か著者に特有な輕妙と豪快を兼ねた筆勢は幾分失はれてゐるが、禪經驗をいさも平易に表出し、禪に心惹かれつゝも尙蚊虻鐵牛を嚼むの憾萬々なる通常の人の心を導いて本地の風光を窺知せしめ、歸家穩坐の前味感を懐かしむるには優れて良き著述である。殊に第二講の初半分に於いては、宗風禪とは別箇に、廣く一般の宗教經驗の檢討による知識を基底として、普通の禪經驗とも云ふべきもの、心理的描寫を巧に試みてゐる點は、宗教經驗に關心を有するもの、見逃し得ぬものであらう。左に内容を示せば――、

第一講、宗教經驗としての禪

- 一、宗教經驗とは何か
- 二、何を佛教生活と云ふか
- 三、佛教の基本的概念
- 四、證三菩提を目的とする禪
- 三、心理學から見た禪

第二講、佛教に於ける禪の位置

- 一、宗教經驗の諸要素
- 二、宗教經驗の諸型
- 三、宗教としての佛教
- 四、楞伽經大意
- 五、神祕主義としての禪、(横川)

R. W. Sellars: Religion

Coming of Age.

pp. x + 293. N. Y. London, 1928.

近代に於ける實證科學の發達は一般に人間の自我意識の覺醒を來し、哲學に於いても亦宗教に於いてもテンポの變改を逼つてゐる。殊に性質上多分に保守性を有する宗教にあつては、今にしてその排棄すべき分子を拂ひ總體的に清算を試み、人間性に立脚する新形式を求むるに非ざれば、今後は到底人心把握の能力を維持し得ぬであらう。Humanismに據る宗教、これこそ未來を約束するものであると云ふのがミシガン大學哲學教授セラーズ博士の大體の所論である。本書は十六章より成り、その前半は宗教の發展形式の概観にして比較的重要な重要なが、最後の數章に著者の所説の要點がある。著者によれば「人間の

靈的生活には成長があり、之までその大なり小なり明かなる段階を經來つてゐる。其は生死の深秘力に祈願する叫びに發生した。而してそれは他界の信仰と云ふ牽引力に心奪はれ、その爲に天國に憧れ地獄を恐る、救濟の宗教となつた。が我々の時代に於いては、それは終に數多の問題と可能性を包藏する現世の宗教と變じつゝある。宗教と人類とは相互に有機的關係にあつた。前者の進歩は後者の成長と密接に開聯してゐた。大體の所、宗教の發展段階は人類の幼兒期、そのロマンチックな青春期、及びその成熟期に對應するものと云へやう。今や宗教は成熟期に達せんとしてゐる(二七五頁)のである。而してその成熟期の標識と見るべきものは、他界主義の脱却であり、陳腐なる神學に換ふるに、自己實現と社會改善を標榜して、歸納的科學に基礎せる一つの新信仰を以つてせんとする所にある。超自然的なものに屈伏する事より生ずる障害を排除して、物質的及び社會的環境に適應する創造力と大膽なる實驗こそ、今後の宗教に顯著なる傾向として見らるゝであらうとする。これより見れば、著者は宗教を撲滅せんとする者ではなく、之に反して、建設的であつて、漸次にヒューマニスティックな大觀を取らんとする世界に於いて宗教的價值にその場所を與へんとする意圖が窺はるゝ。二、三六頁に、「我々が現在住してゐると思はるゝ世界に於いて、我々は如何にして人間の靈的生活にその位置と格式とを與へ得るか」と問を發し、「時間、空間的自然の範圍に於いて可能なるが如き人間の功業の言葉に於いて靈的なものを再定義す

る事に依つて、而して物理的及び生物學的概念と同様に社會學的及び歴史的概念を包含せしめんが爲に自然なる觀念を擴大する事に依つて(「第一四章」)と答へてゐる。されば此等の基礎に立つ將來の宗教はテクニク、價值、及び信念に於いて等しく過去のそれより全く趣を異にするであらう。(「第一六章」此の結果 worship はその働きの領域を失ひ、prayer は音樂、詩、靜かなる郊外散步、等の慰藉に代はられ、宗教的價值は文化人の社會的及び審美的關心によつて決定せられ、信念は、或る批判的哲學によつて精練され綜合せられた實證科學のそれとなり、教會は社會奉仕の爲の組織に靈的活動を見出すであらう。斯くの如き平面的な場面を現はす中にも「想像と感情を意味する低度の神祕主義」(「二三五頁」)を認容する餘地はあらしむ。著者は「宗教の引力の中心が人間の方向に振り動かんとしてゐる事は大體の所確實であるが、宇宙意識の半影は常に殘存するであらう。そこに正統の神祕家は隠れ家を求むるかも知れぬ」と云つてゐるが之に對する理解は、リュエバの研究の表面意識に止まつてゐる。

とまれ、上述する所によつて知らるゝ如く、不定的な代置物を以つて神を排して見ても「此のテクニク、價值、及び信念の新しいキムプレックスが果して宗教と云へるであらうか」と云ふ間に對して著者より明白な解答を得る事は困難と思はるゝ。此の新しい福音は結局宗教ではなく、宗教の衣を借りて變裝せる自然主義的倫理ではあるまいか？

今、著者の用ふる宗教の意味を尋ね、著者は宗教に就いて如何なる理解を有してゐるかを見んとするに本書中何處にもそれが示されてゐない。尤も定義らしきものは二三之を見る事は出来るが、之等はすべてあまりに曖昧であり徒に疑問を誘致するに止まつて何ら解明の用をなしてゐない。「宗教は生命の價值に對する忠實これ」(「三頁」)、「宗教は人間生存の精神であり、質である」(「三三頁」)「宗教は何よりも、生きんとするも、がきに於ける人の必要と希望より生起する人間生活の表現であり」(「五一頁」)又「運命に面接せる人間生活の策戦術である」(「一六頁」)と云ふが如きはそれである。

著者の云ふ如く宗教が價值に關係してゐる事は確かである。然し宗教に特有な價值は(基督教にあつては)禮拜に於いて明かに實現せらるゝ事は、近くはフライトマン及びウイーマンの所説を見てもわかる事である。然るに著者は之を排して、現實を逃避し想像の所産なる他界に歸せんとする無益な欲求と關聯する陳腐なテクニクとしてゐる。之は明かに基督教の否定ではないか。尙又著者は宗教經驗の事實、即ちその直接與料の検討を閉却してゐる。アレキサンダー氏の「空間、時間と神」に依れば、如何なる眞面目な哲學的綜合もその一條件として宗教經驗の事實を正當視すべき事を認めてゐる。之の經驗に充分なる理解を有する氏は「若しも宗教的價值が迷妄に非ざれば實在は禮拜の對象となる神にその場所を與へねばならぬ」として問題解決の本質的條件を捉へてゐる。要するに内より見るか外より見

るかに依つて多大な開きを生ずる。而して著者は後者の見方によるものである。宗教の名の下に宗教を語るに、その經驗の直接史料とそれを基礎とする展開とを抜きにして、成熟期に入らんとする宗教を論ずるは全く不健全である。

とは云へ、本書には宗教の成長振り（歴史的確實性はともかくも）、近代科學の有する宗教的意義、及び近代人の宗教に對する態度等に就いて見るべきものが多分にある。一般にヒューマニズムの内容規定が未だ充分になされてはゐぬが、同じ題目を扱へる著作が漸次その數を加へんとしてゐる時、本書の如きは所謂「ヒューマニズムの新宗教」を知るには一讀に値する良書である。（横川）

H. R. Willoughby: Pagan

Regeneration

Pp. xi+307. Chicago, 1929.

之は希臘羅馬の時代のイリュウシス、デオニソス、ミトラ、ヘルメス等のカルトの創成とフイロの哲學の解釋の研究である。著述の動機は、ローロの基督教が神祕的力調を帯びて發達するにいたつた當時の宗教的環境を描出せんとするにある。著者によれば、當時の社會的、宗教的、哲學的傳統によつては満足されなかつた或る根本的な人間の欲求が超自然主義や Occultism によつて癒やされた。當時一般の風潮は厭世的であつた。人々は

活實的な生命の解釋に飢ゑ、救済の確實を求め、見えざる世界との接觸を切望した。苟も宗教が何らかの適切な訴を人心に爲さんが爲には、それは人々の情緒を動かし、想像を捉へ、確實な慰安と希望とを興ふるものでなくてはならなかつた所の個人主義の時代であつた。而して、此の目的を達し、彼等に満足と與へたものは、東洋神祕主義に起因する儀禮であり、祕密行であり、神の自想、theophagy、權化、及び、以人爲神（Apotheosis）等であつて、之らはすべて神と人との親密なる關係に入らしめたのである。

これらのカルトの或るものは明かに野蠻なものであり、初期のキリスト教の護法者達や宗論學者によつて痛烈に攻撃されたとは云へ、當時の状態にあつては之らは確かに社會的、宗教的、倫理的價値を有してゐた。一般的な倦怠と飢餓の襲撃は貧富貴賤の差別を撤し、等しく一個の人間として同一レベルに立たしめた。生々たる宗教的意味なき生活は荒蕪となり、超自然的法令なき道德的希求は徒勞と感ぜられた。第一世紀の人々の願求したものは理想と云はんよりは寧ろ理想實現の爲の力であつた。斯かる力はシンボルと儀禮に於いて、理想の發現すると信ぜられた本源と融合する事によつて與へられたのである。

之らの神祕宗教 Mystery religion の齋らず倫理的、社會的効果に關する著述としては出色ある近來の勞作である。（横川）

René Mannier: Introduction a

La Sociologie, Paris Alcan

1929. pp. 109.

本書は、序文に「社會的世界七日見物の旅行案内書」と云へるが如く、僅々百九頁の小冊子であるが、或る意味に於いて、現在佛蘭西に於いて行はれつゝある部分的特殊の諸研究の統一に一方を與へんとする點に於いて、重要な貢獻をなすものであらう。而して著者ルネ、モーニエの立場は、彼が元來デュールカーム學派に屬しつゝ、而もブーケレの如くこれに據らずしてウォルムスの綜合的傾向をも合はせ採らんとするところにある。今簡単に紹介すれば、彼は先づ第一章「社會學の觀念」に於いて、社會學を定義して「時空間的に觀察し得らるゝ人間社會の記述的、比較的及び説明的研究」なりとし、かく社會生活を構成する事實の記述、比較及び説明をなすべきものと理解せらるゝ。社會學は、要するに人間に關する實證的智識の學に外ならぬ故、廣義の人類學の一部門とみらるべきであると主張し、社會學の名稱はむしろ社會人類學と稱する方が適切であると論じてゐる。

次に第二章「社會事實の定義」に於いては、社會を人間の集合なりと説くは、社會の單なる外的特性を示すに過ぎず、社會はむしろ權威によりて説明せらるべきであるとし、「社會とは同一權威に従ふ人間集團である」と定義し、或は又「同一の慣習を有する人間集團」とも云ひ得ると云つてゐる。即ち社會は、多

数の人間が共通様式に従ひ、共同に思惟し行動する時形成せらるゝのである。而してこれ等反覆せられ強制せられ又は承認せられた一つの權威を生ずるところの共通慣習が即ち社會事實と云はるゝものに外ならざる故、社會はかゝる社會事實を盛る容器である。而してこれ等社會的慣習の或るものは信仰によりて命令せられ、或るものは法律によりて強制せられ、又或るものは輿論によりて規制されてゐる。故に社會事實の統一性には、強制、習慣、承認、或は義務、傳統、傾向の三種の程度が存在し、具體的にはこれ等各種のもの、無数の交錯に於いて見出される。而してこれ等三種の程度に於いて現はるゝ社會事實の拘束は又、神祕的拘束、法律的拘束、倫理的拘束、譏刺的拘束の四様式に於いて觀察せらるゝと論じてゐる。

次に第三章、第四章に入りて、社會事實の分類を試み、これを行ふには、生物學的分類をこれに應用するを最良法となし、社會事實を分類して、社會の器官たる社會的集團とその機能たる社會的人間様式の二とし、前者を社會形態學の對象、後者を社會生理學の對象とすべきものとてゐる。而して先づ社會集團を生物學的集團、地理學的集團、社會的集團に三大別し、各種多様の社會學的集團は更に、地位的結合と機能的結合とに分ち得るとしてゐる。次に人間様式は、觀念と行動、或は感情及び思想と事實及び態度即ち判斷と運動との二種より成立する、而してこれ等觀念と行動とは、その目的或はそれを誘發する欲求によりて分類せらるゝとなし、かゝる欲求は、經濟的欲求（生

産生活的欲求)、政治的欲求(關係生活的欲求)、神祕的欲求(識仰生活的欲求)の三種より成立すると論じてゐる。

次に第五章社會學の方法に入り、第一事實の記述、第二事實の比較、第三事實の説明の三つを擧げてこれを詳述し、純客觀的數學的方法を主張してゐる。

最後に第六、第七の兩章に互り、民俗學に關する豊富なる文献を擧げて社會學の歴史を詳述し、社會學の成立、進歩に重要な影響を與へたものは、比較民俗學的諸研究なりと論じてゐる。

終りに本書の内容を示しておかう。

○第一章——社會學の觀念(第一節社會學の定義、第二節社會學の限界、第三節社會學の名稱)

○第二章——社會事實の定義(第一節社會の觀念、第二節社會事實の觀念、第三節社會事實の制約)

○第三章——社會事實の分類(1)人間集團(第一節生物學的集團、第二節地理學的集團、第三節社會學的集團)

○第四章——社會事實の分類(2)人間様式(第一節生産の生活、第二節關係の生活、第三節讃仰の生活)

○第五章——社會學の方法(第一節事實の記述、第二節事實の比較、第三節事實の説明)

○第六章——社會學史(一)豫備(第一節聖書的批判的比較、第二節地中海沿岸に於ける比較、第三節一般的比較)

○第七章——社會學史(二)基礎(第一節事實の比較、第二節原因

の確定、第三節原因の證明) (福井)

宗學研究 第一號

大谷派本願寺内宗學院

宗學研究會編

本年初夏の頃より發刊を豫告せられ居りし宗學院の「宗學研究」は、この十一月末に漸く刊行せられたり。口繪、阿彌陀經延書寫本(正平十五年)一葉、本文は、眞佛土研究の序説(齋藤唯信)、宗祖の三願三經の眞假分判(河野法雲)、御文の研究(一)(上杉文秀)、一念多念論(花山大安)、二種深信考(前篇)(松原恭讓)、親鸞聖人母公の研究(目下無倫)、御文流傳の初期とその編輯に就て(光本寬隆)、宗憲上より見たる宗學の地位(下間空教)、淨土文類聚鈔を貫く宗祖の根本精神(稻葉教山)の九篇よりなり、附録として眞宗典籍目錄(淨土三經之部)が掲げられて有り。何れも雄篇大作なるが、就中、齋藤、花山兩師の研究は注目すべきものなるが如し。又眞宗典籍目錄の編纂は宗學研究會としては誠にふさはしきものにして、宗學界の現状より云はゞ、寧ろ此種の研究こそ、研究の中心となりて然るべきものなるべし。思ふに宗學の研究は、餘他の學術研究に比すれば、少くも半世紀は遅れ居る可し。而して其原因の最大なるものは、聖典の基礎的研究を忽にし居る事にあり。然り先づ典籍目錄を編み、次に諸多の刊寫本を對校して、校本を編み、此を研究して

定本を作る可し。これ宗學界に於ける研究の第一歩なり。此意味に於いて、眞宗典籍目錄の編纂を多とするなり。

西派に於いては昨年より宗學院論叢を刊行しつゝあり、又近く眞眞學報の刊行せられたるあり。東派の宗學研究を併せて、三種の眞宗學専門の研究雜誌が定期に刊行せらるゝ事となりたる也。これら三種の雜誌の刊行せらるゝに至りし原因は兎もあれ角もあれ、宗學の研究論文の數多く發表せらるゝは、宗學の爲に頗る慶賀す可き事なりとす。こゝに宗學研究の愈々隆盛ならん事を念願しつゝ、紹介の筆を擱く者也。(大 下)

(獨版三百頁。定價壹圓。大谷派本願寺内宗學研究會發行)

E. Obermiller (Translator) :

History of Buddhism by Burston,

I. Part, The Jewelry of Scripture.

pp. 187.

Heidelberg 1931, N. 15.

ハイデルベルヒ大學教授 Max Walser 編する所の *Materialien zur Kunde des Buddhismus*, 18. Heft として、西藏人 P. Ton の著はせる佛敎史の第一部の英譯が出版せられた。譯者はレニングラード佛敎學會の祕書官 E. E. Obermiller 博士であり、同氏は先きに「正理一滴」の梵藏並びに藏梵逐字的索引を出して名聲ある人である。

引を出して名聲ある人である。

本書には同氏の師なる Th. Stecherbatsky 敎授の序言がある。それによれば、P. Ton (Burston, or Burston Rin-Chen-grub-pa) は西紀一二九〇——一三六四の出生にして、中央西藏の産であり、有名なる宗喀巴の改革以前に屬する人物である。而して彼は西藏・蒙古等に於いて今日も大學者として教く尊敬せられてゐる。P. Ton の「印度・西藏佛敎史」(Bod-Chos-kyun) は、かのターラナータの「印度佛敎史」と共に、佛敎史上貴重なる資料であるが、今日までその一部分は用ひられしことあるも、全體の翻譯は存しなかつた。而も本書はターラナータの書とは組織を異にし、三部分より成り、初めに當時西藏に存せし佛敎關係の書籍を組織的に配列し解説をなし、次に歴史を述べ、終りに甘殊爾・丹殊爾藏中の書名・著者名・譯者名の組織的目錄を附してゐる。今その第一部の英譯を得たのである。チエルバツキー敎授も「第一部は歴史的に科學的價值あり。それは直接間接苟くも佛敎の印を帯びる一切のものの綜合を表はす。この綜合はやがて又歐洲の佛敎研究の究極目標たるものである。」と賞してゐる。P. Ton は最後のナルタン版藏經編輯官の一人なりし故に、彼の「佛敎史」はこりもなほさす此の藏經の序言及び内容目錄に當る譯であるといはれる。

さて今譯出の第一部「聖典寶聚」は如何なる内容を有するかを見る。先づ初めに長々且獻辭を連れて後、第一篇は佛敎敎義の概觀を述べる。而もその態度は用意周到、(一)先づ敎法學習及び

宣説の功德より説き起し、殊に大乘教のそれを主張し、(二)次に教法を記せる文書即ち聖典の概観をなし、その中法の意義・語源より説き始めて、詳細に術語の解釋、教理の説明を興へてゐる。又(三)師弟教育の規定を出して、教へらるゝ教法・教ふる方法・學ぶ方法の性質を検討し、實踐的方面を述べてゐる。第二篇には佛教興起を取扱ひ、釋迦牟尼出世までの諸劫波、世尊の此世への出現を記し、小乗・大乘各別の傳承によつて、本生の功德造積を論じ、又成等正覺を議して、佛身論に迄及んでゐる。大略かゝる内容を有するが、最も注意すべきは、本文中至る所に各種の經論からの引用偈頌が甚だ多く、譯者は一それらを原作——多くは丹殊爾中の西藏譯——に比定してゐる所のその努力である。實に博識多才驚くべきものがある。幸ひに本書に續ぐべき第二部の譯書の速やかに出でむことを望むのみである。

(龍山)

編輯室から——武内博士の「教行信證所引辯正論について」は編輯委員の紹介に依つて掲載したものであるが、宗學に對して、更に宗學の研究方法に對して少なからぬ貢獻をなすものであると思ふ。博士に對して感謝する次第である。次に本號に掲載の豫定であつた龜田教授の「留鏡研究史」は、教授病氣の爲、次號へ廻はず事になつた。教授二十餘年研鑽の蘊蓄が傾けられる筈である。刮目して待たれんことを乞ふ。

新刊紹介

大谷學報

行發回四年

月十月・月七月・月四月・月一

昭和六年一月五日印刷
昭和六年一月十日發行

(第十二卷・第一號)

不許複製轉載

會費 年額 金參圓(但前金送料共)
一部賣 普通號 金壹圓(送料六錢)
價 特輯號 隨宜申シ受ク(送料六錢)

廣告料	
普通頁	一頁 半頁
表紙裏	參拾圓 拾七圓

編輯者 大谷學會
發行所 大谷學會
左代表者 梶浦眞了

印刷者 須磨勘兵衛
印刷所 大谷大學出版部
京都市北小路新町西入
京都市烏丸頭大谷大學内

發行所 京都市烏丸頭 大谷大學内 大谷學會

電話西陣一六四〇番
振替大阪四九九十番